戦前の YMCA 体育室における計画概念と形態に関する史的考察

社会用体育館に関する建築計画史的研究 その1

正 会 員 上 和 田

茂*

1. はじめに

本研究は、現代の大衆レクリエーションの隆盛と定着化に対応する新たな体育館の在り方を求めるにあたって、その隘路となる従来の固定化した計画概念および形態の歴史的形成過程を解明するとともに、今後の発展方向の手がかりを得る目的で、戦前戦後の体育館計画の歴史の変遷を考察するものである。

まず、戦前においては、一般社会人が利用できる公共の社会用体育館は、昭和 12 年に文部省により開設された東京一ツ橋の国民体育館を除いては存在しなかった^{*1)}。

しかし、これに代わるものとして、主要都市には明治から大正にかけての早い時代に近代的な屋内体育施設を備えた YMCA の会館があり、これが、青年キリスト教徒はもとより一般社会人に広く開放し事実上社会用の体育館としての役割を果たしていた^{*2)}。これらの多くは米国 YMCA の資金援助を得、施設内容も米国の YMCA 会館に範をもとめ、明治後期以降続々と建設されたものであるが、建設時期にしたがって施設構成の面で明確な変容を遂げている。また、それを通して、体育館の計画概念について変容の跡をたどることが可能である。この過程を概略的に表現するならば、レクリエーションスポーツ施設から競技利用中心型の施設への変容といえることができる。

一方、戦後の公共体育館にも大きな変容がみられ、それは戦前の YMCA の場合とは逆に、国体を契機とする競技用施設から、現在、徐々に進行中のレクリエーションスポーツ施設への変容としてとらえることができる。

この両者の変容過程は一見逆行とみえる。しかし、戦中期の断絶を度外視すると、この二本の線は単なる逆行ではなく、屋内スポーツはもとよりわが国の近代スポーツの発展における「啓蒙期の中産階級によるレクリエーション……普及期・前期（戦前）の競技スポーツ……普及期・後期（戦後）の競技スポーツ……成熟期で現在進行中の大衆レクリエーション・コミュニティスポーツ」、さらにこれからの「大衆によるレクリエーション的競技スポーツ」ともいえるべき段階への発展に連なる道筋と、

それに伴うスポーツ施設の変容の過程として、らせん状ながら一本の線に結ぶことができる。

そして、戦前の体育館における計画概念および形態的な到達点は、戦後の体育館計画の出発点として一つの原型を成しており、ある意味での固定化をもたらすものであったと考えられる。それは、スポーツ活動の状況が変化しつつある現在においてもなお抜きがたい強さを持っており、したがって、その形成過程を明らかにし、その由ってくる所以を探ることが、今後の体育館計画の在り方を論じる上で重要な手掛りを提供することになろう。

このような屋内体育施設の変容過程を論じることが本研究の目的であるが、戦後の流れについては別稿に譲り、本稿では、戦前における YMCA の屋内体育施設を中心に、その変遷を明らかにすることにしたい。

ところで、これからの公共地域体育館は従来の貸館的施設から脱却し、地域住民の交流の場となり得るクラブ型の施設として計画されることが望まれるが、この点、会員制によるクラブ型の施設としても先駆的であった戦前の YMCA 屋内体育施設から多くの示唆を得ることができる。特に、施設の充実度が高い東京 YMCA では、複数の体育部を持ち多様な活動を展開しており学ぶべき点が多い。本研究のもう一つの目的はこの点を明らかにすることであり、次稿で報告することにしたい。

なお、本研究に類似する既往研究は少なく、建築学では、青木正夫氏による学校体育館の歴史を対象とするものを除いては、社会用体育館に関してはみるべきものはない³⁾。体育学では、体育史の分野において、木下秀明氏による明治以後の体育館の形成史に関する研究があり、筆者も多くの示唆を得た⁴⁾。本研究は、この木下氏の研究において手薄と思われる社会用体育館の歴史の変遷について計画史的視点から追究を深めたものである。

なお、引用文中の旧字体は新字体に改めた。引用文献と注は区別せず使用順に番号を表記するが、文献名以外に注釈を加える場合はく*1>のように、*を付した。写真・設計図の出典出所は注欄の末尾に一括表記した。

2. 体育館という用語についての検討

2.1. 体育館という呼称の出現

変容過程の考察に入る前に、「体育館」という用語に

* 九州産業大学 助教授
(昭和 61 年 12 月 9 日原稿受理)

ついて検討しておきたい。

前出の木下氏は、その著「近代日本における体育館の歴史」の中で⁵⁾、「明治40年東京上野公園で開催された東京勸業博覧会に、日本体育会は体育館を建設した。おそらくわが国で体育館と呼んだ最初であろう」とされている。筆者の調査でも、これ以前に体育館と呼称された建物はもとより、用語としての使用例も見当たらない。

氏はさらに続けて、体育館という用語の出現理由を推測しておられる。それを要約すると、「屋内体操場とは比較にならない規模と設備、広い運動領域を有（傍点筆者）」するもので、「体操場についての認識では把握できない建造物であった。それゆえに“場”でなく“館”を用いて『体育館』と称したのであろう」と、さらに施設の一部に屋外施設を含んでいたので「屋敷」という意味での「館」という表現を用いたことも考えられるとして、おおむね「館」の斬新性に力点をおき論じておられる。

筆者はこの推測の内容そのものを否定するものではないが、以下に示すように、事実はもう少し単純でしかも段階的に形成されたのではないかと推測している。

というのは、この東京勸業博覧会の4年前の明治36年に大阪で開催された第5回内国勸業博覧会において、同じ日本体育会が「体育場」なるものを設置し、諸種の体育実技をその器具と共に紹介している⁶⁾。この「体育場」は一部屋内施設を含む屋外施設であったが、それまでこの種の屋外施設は「体操場」もしくは「運動場」と呼称されるのが一般的であった当時としては、聞き慣れない言葉であったろう⁷⁾。

この新奇な表現が用いられた理由は、たんなる徒手体操や器械体操にとどまらず、テニスをはじめ諸種の球技を含む広範な運動領域を実施したのに加え、体育に関する諸文献・統計資料、施設設計資料、古武芸の道具の陳列など体育に関する総合的な情報提供の場であったことから、これらの諸機能を示す表現として、“体育”場が採用されたのではないかと推測される⁸⁾。

とすれば、これから4年後の東京勸業博覧会の屋内体育施設が体育館と呼称されるのに難しい解釈は必要としない。何故ならば、明治10年の第1回内国勸業博覧会以来、いずれの博覧会においても会場内の陳列用の建物はすべて「館」を付されて名付けられていたからである。美術館、水族館などは、体育館と同様に、その名が恒久化した施設にも継承された好例である⁹⁾。

このような脈絡からすれば、体育館という呼称の画期的な意義は、体育“館”にではなく、むしろ“体育”館にあったというべきであろう^{*10)*11)}。

2.2. その後の展開

以上のように、体育館は「かなりの規模と設備」を有し、「広い運動領域」に対応する屋内施設を表す用語として出現したわけであるが、当時このほかの早い使用例

表—1 「体育館の必須なる要素」および国民体育館の構成諸室との比較

◎ 安田氏による「体育館の必須なる要素」(S11)	◎ 国民体育館の構成諸室 (S12)
1. 運動場 —— 体育室	大運動場 (25.4×33.2m)
2. ランニング・トラック	(なし)
3. インドア・フィールド	(なし)
4. 器具、器械室	運動器具庫・物置
5. 指導者或いは監督室	監督指導者室
6. 医務室	医務室
7. 研究室或いは実験室	(なし)
8. 教室	(なし)
9. 更衣室 (A.男子更衣室、B.女子更衣室)	男子更衣室、女子更衣室
10. シャワールーム及び浴室 (A.男子用、B.女子用)	シャワー室
11. 化粧室 (A.男子用、B.女子用)	洗面所
12. 観覧席	観覧席 (貸席席を含む)
13. 映写室	(なし)
	その他 音楽室(放送室)、休憩室 貸席室、事務室 屋外水泳場

として、管見では次の2例をあげることができる。

その一つは、明治44年東京YMCA会館の増築計画案の中で「現在の講堂を模様替して体育室に兼用せしめ別に屋上運動場、ボーリングアレー室、浴場、更衣室を備ふる」複合施設を体育館と呼んでいる¹²⁾。

他の一つは、大正2年大阪市体育奨励会評議員会の決議の中で、将来計画の4番目の項目に「体育館建設」が掲げられているが、内容は不明である¹³⁾。

公的に体育館が論じられるようになったのは、球技が隆盛となり、またオリンピック誘致に動きだした昭和前期に入ってからである^{*14)}。昭和6年に文部省が開催した「体育運動管理講習会」の席上での体育館に関する講演では、「体育館」は、最低バスケットボールを可能とする規模の体育室に、更衣室、観覧席、および集会室と兼用する場合の舞台を付設したものとの簡明な解説がなされている¹⁵⁾。また、昭和11年に出版された「師範大学講座体育第11巻、体育館、安田弘嗣」によると、「体育館の必須なる要素」として表—1に掲げるような、当時の体育館の水準を遙かに越える諸室が列記されている¹⁶⁾。

しかし、実際にはこのような定義にかなう施設の実例は、東京YMCA体育館と国民体育館を除いてはほかに存在しなかった。それで、「体育館」は専ら理想もしくは目標概念としてか、体育館の水準には必ずしも達しない屋内(雨天)体操場の便宜的な呼称として用いられるかのどちらかであった。文部省の講習会における体育館の解説はこのような水準を前提としてのものであった。

2.3. YMCA 屋内体育施設の呼称

一方、YMCAの場合には、設計図には例外なく「GYMNASIUM」または「AUDITORIUM & GYMNASIUM」と記され、建設後も「ジムナジウム」

と呼ばれることもあったようだが、和名については、表—2に示すように多様であった。その平均的な組み合わせでは「室内体育場」となるが、東京 YMCA を除くすべてが会館建物内施設であることから、体育館と呼ばれなかったのはむしろ当然のことであつたろう。

このような施設をあえて体育館の範疇に含めて本研究で論じるのは、以下に列記する諸理由からである。

- ① 体育館の中核的要素である大体育室を備えている。
- ② 更衣室、シャワー室、医務室、観覧席などの付属諸室を完備している（先の文部省説を満足する）。
- ③ 体育館の洋名である GYMNASIUM は、元来、独立建物だけでなく、建物の一室をも指していた¹⁷⁾。

このような理由により、外形はともかく内実は体育館の範疇に含めて全く差し支えないものと判断した。なお、以後の本文中ではすべて体育室という。

3. 戦前における YMCA 屋内体育施設の変容過程

3.1. 時期区分

戦前における YMCA の屋内体育施設の変容過程は、大きく4つの段階に分かつことができる。第Ⅰ期は、大阪 YMCA が日本の YMCA で初めて本格的な会館を持った明治19年から明治末期までの間で、専用の体育施設はなく講堂を必要に応じて体育用途に転用してい

た時期。第Ⅱ期は、普及し始めた屋内スポーツ・レクリエーションが円滑に活動できるよう、講堂兼体育室として設置され、兼用ながら体育室が明確に計画されるようになった明治末期から大正初期にかけての時期。第Ⅲ期は、活動の進展に伴い、体育室が講堂から分離独立し専用化が計られ、諸設備も充実するようになった大正中期。第Ⅳ期は、内外で屋内スポーツが一段と盛んになり、頻繁に開催される各種の試合や大会などの競技を観戦するのに都合がよい形態をとるようになった大正後期から昭和初期にかけての時期である。以下、各時期を追って考察を進める。なお、計画上の発展を追う場合、設計完了年を基準とする考え方もあるが、YMCA では設計完了時から着工までかなりの期間を要しているものもあり、また着工後の計画変更も少なくないので、本稿ではすべて竣工年を基準とした（表—2、図—1）。

3.2. 第Ⅰ期

わが国が近代国家としての一応の体制を整えた明治末期は、欧米諸国から摂取されたスポーツがようやく最初の定着期へと向かい、学校体育はもとより社会体育の促進に目が向けられるようになった時期でもある。

明治32年には「……国民全般の体育奨励を務むべし」として、文部省は日本体育会に補助金付きで一般公開用

図—1 戦前における YMCA 体育室の変遷

表—2 戦前の YMCA 屋内体育施設一覧表

名 称	建設年	体育室設置形式	体育室名称	体育室規模		更衣室の有無	その他の付属体育施設・設備	会館建物概要・設計者
				フロア面積	有効吹抜面積			
大阪 YMCA 1 期	1886 (M18)	講堂の転用	—	—	—	無	柔剣道場 (M40年に増設)	木造煉瓦造2階建 宜教師 J. オルチン
東京 YMCA 1 期	1894 (M27)	講堂の転用	—	—	—	無	体操教場	煉瓦造3階建 J. コンドル
長崎 YMCA	1906 (M39)	講堂の転用	—	—	—	無	小運動室	煉瓦造3階建 スタウト (工事監督)
京都 YMCA	1911 (M44)	専用体育室	屋内運動場	14.0×10.5	14.0×10.5	有	ボーリング室 (T5 に設置)	煉瓦造4階建 (B1階) 設計フランツ・監督ゲーリス
神戸 YMCA 1 期	1913 (T 2)	講堂と兼用	大講堂	20.6×14.1	14.7×10.6	有	ギャラリー	煉瓦造3階建 (B1階) ジャック & ハットー・ゲーリス
横浜 YMCA	1916 (T 5)	講堂と兼用	体育場	16.5×13.0	16.5×13.0	有	体育主室室 ギャラリー	RC・煉瓦造4階 (B1階) W.M.ヴォーリス
東京 YMCA 2 期	1917 (T 6)	専用体育室	室内運動場	23.8×17.2	20.1×13.6	有	ランニングトラック (ギャラリー兼用) 室内プール、柔剣道場 ボーリング室、体育主室室・医務室	RC造3階建 W.M.ヴォーリス
神戸 YMCA 2 期	1922 (T11)	専用体育室	室内体育場 運動場	20.8×13.2	18.0×11.6	有	柔道場、体育主室室、 ギャラリー	RC・煉瓦造4階 (B1階) W.M.ヴォーリス
名古屋 YMCA	1924 (T13)	講堂と兼用	室内体育場 体育室	18.5×13.0	18.5×11.0	有	柔道室、 ギャラリー	木造3階建 W.M.ヴォーリス
大阪 YMCA 2 期	1925 (T14)	専用体育室	室内体育場	21.8×13.3	18.3×10.0	有	特別練習室、 ギャラリー	SRC造5階建 (B1階) W.M.ヴォーリス

の模範体操場の設置を命じ¹⁸⁾、明治45年には東京市教育会が「人口5万人に対して1ヶ所以上の割合を以て市内各処に運動場を設置すること」、および「官公立諸学校の運動場を開放して市民一般の運動場に使用すること」と答申するなど¹⁹⁾、スポーツ行政にも大幅な進展がみられた。また、日本体育会は、明治36年に大阪市で開催された第5回内国勧業博覧会において特設体育場を、さらに明治40年の東京勧業博覧会では室内温水プール付きの体育館を設置し、社会体育の啓蒙に務めている²⁰⁾。

YMCA による体育事業がその緒についたのはこのような状況を背景としていた。早くも明治19年大阪 YMCA では、「近人文弱に流れる敢為の気乏しきを矯正するため、宗教の力とあいまって体育の必要を感じ(傍点部筆者加筆)」として大阪体育会を組織し、「青年会館の庭園にて、毎日快活なる運動をなし」ていた²¹⁾。また、東京 YMCA では明治36年に体育倶楽部が発足し、毎週水曜と土曜日の週2回、室内にて、「最新式美容術呼吸法、ピンポン、輪投げ、バスケットボール(日本式：筆者注)*²²⁾*²³⁾」を、その後大正6年に体育館が完成するまでは、会館敷地内の空地において、テニス、ハンドボー

ル、バスケットボール、バレーボール、インドアベースボール、弓術の指導が行われていた²⁴⁾。長崎 YMCA でも、明治39年に完成した会館内でバレーボールが指導されていた²⁵⁾。ここまでの YMCA の会館内には専用の体育室はなく、必要に応じて講堂を転用していた(図—2)。

明治44年に完成した京都 YMCA 会館の中には、講堂とは別に専用の体育室が設けられ、インドアベースボールやバスケットボールが行われていたが、本格的な体育室には今一步の規模のものであり、卓球大会などの際にはやはり講堂が転用されていた²⁶⁾(図—3)。

当時は軍国調の鍛練主義の影響もあって専ら戸外運動が奨励されており、屋内での運動は不健康なものとして退けられる傾向が強く、またその呼称も「室内遊戯」として遊びの範疇に含められており、運動あるいはスポーツとしての市民権を得るには至っていなかった²⁷⁾。

ただし、日本古来の柔剣道については例外であり、時代遅れのものとして久しく低迷していたが、武道推進派の強い圧力もあって、明治38年文部省の「体操遊戯取調報告」において、教科外に行うべきものとの条件付きながら学校教育の中に明確に位置付けられたことに象徴されるように、剣道、柔道、弓術は以後徐々に奨励の方向に向かう²⁸⁾。YMCA もこの例外ではなく、大阪 YMCA において明治40年に本館とは別に柔剣道場を新設して普及に努めたのをはじめとして、明治末期から大正中期にかけて各地の YMCA で盛んに行われていた²⁹⁾。

3.3. 第Ⅱ期

屋内スポーツ軽視の風潮の中であって、日本の

図—2 大阪 YMCA 第1期
会館・講堂

図—3 京都 YMCA 会館・
講堂

YMCA が屋内体育施設の整備へと向かうのは、明治 43 年に開始された北米 YMCA 同盟の海外援助事業により多大の財政援助を得たこと、さらに明治 45 年の第 4 回日本 YMCA 同盟総会において、今後 3 か年の方針として、体育施設の増設と体育指導者の養成をとりあげ、体育事業の振興を決議したことによる³⁰⁾。

大正 2 年に完成した神戸 YMCA 会館には、講堂との兼用による体育室が設けられた。当時、米国の会館のスタイルは体育館を主とする「ニューヨーク型」と称されるものが主流であり、「シカゴ型」と呼ばれる講堂を中心とするスタイルは旧式として退けられていた³¹⁾。それにもかかわらず、神戸の会館にこの旧式が採用されたのは、当時の日本の YMCA 活動の発展段階を反映しているといえようが、設計者であるヴォーリズの設計協力者がシカゴ在住者であったことにも原因があらう^{*32)}。

ではあるが、この講堂兼用体育室は従来の講堂とはかなり趣を異にしており、むしろ体育用途特に球技の便を最大限に重視した形式となっている。すなわち、ステージに相対してコの字型に 2 階ギャラリーが設けられる講堂特有の形態を残してはいるものの、短辺側にステージを置くいわゆる「タテ型」と呼ばれる通常の講堂の形式を排し、長辺側の中央にステージを置く「ヨコ型」の形式を採用し、かつ吹抜け部分を広くとっている。こうすることによって、ステージに邪魔されることなく両短辺側にバスケットを設置することができ、また広い吹抜け空間によってボールゲームが円滑に行えるようにくふうがなされている。また、ヨコ型の利点の一つは、ステージを見学（観覧）席としても代用できることにあるといわれているが³³⁾、写真によるとまさにそのような使い方がなされていてまことに興味深い。おそらく最も先駆的な実例ではないかと思われる（図—4）。

続いて大正 5 年に完成した横浜 YMCA も講堂との兼用であったが、一段と体育用途への傾斜が進んでいる。まず、固定ステージが無く、2 階ギャラリーも見学用として後部に申し訳程度に付設されているに過ぎず、壁には肋木が施され、そのため窓は高窓となり、天井からは吊り輪などの諸体育設備が固定され、また、はりは露出しており、実質的には体育室と呼ぶ方がふさわしい形態をなしていた。次の専用化に至る前段階とみなすことができる³⁴⁾（図—5）。

図—4 神戸 YMCA 第 1 期会館・講堂兼体育室

図—5 横浜 YMCA 会館・講堂兼体育室

ちなみに、明治 39 年に建設された長崎 YMCA の増築計画案が大正 2 年に作成されているが、これによると講堂の中にあったステージがなくなっており、この頃から体育用途への傾斜がはじまったことが傍証される。

このように徐々に屋内体育施設の充実に向かうことになるのであるが、この時期の体育館はどのような性格の施設としてとらえられていたのだろうか。

神戸、横浜の会館建設に先駆けて渡米した日本 YMCA 同盟の当時の主事・小松武治は、渡米実話として「終日身を勞して家庭に或は田舎に帰へらんとする途中に、全く一日の勞を医し晚餐を快く済まして明日の事業を取るの元気を養ふと云う便宜あり」と、米国 YMCA の体育館での体育事業の効用を紹介し、同様の施設を日本の YMCA に整備することを願望している³⁵⁾。ここには体育館が、都市勤労者が退勤後の夜間に行う日常的なレクリエーションの場として積極的に位置付けられている。わが国におけるそれまでの体育館のほとんどは学校体育用の施設であり、しかも「雨天体操場」という呼称に象徴されるように、たかだか天候不順に対処するための臨時的使用施設として消極的な役割しか付されていなかったのに対して大幅な意味転換を示すものである。とはいえ、この期の体育室はまだ貧弱で、「体操場」の延長線上から脱するまでには至らないものであった。

3.4. 第三期

YMCA のスポーツ活動は、大正 2 年に北米 YMCA から派遣された体育事業の専門家である F.H. ブラウンの来日以後急速に進展した。新設なった神戸および横浜の体育室を始め、各地で体育活動の指導を行い、本格的なバスケットボール、バレーボールを普及した。

このような時期に建設されたのが、大正 6 年に完成した東京 YMCA の体育館である。これも最初は既存会館内の講堂の模様替えによる兼用体育室の計画であり、前期の神戸、横浜と同じレベルに位置付けられるものであった³⁶⁾。それが専用の体育館の計画へと発展したのは、直前に 2 回にわたり渡米し米国の YMCA をつぶさに視察して帰ってきた当時の東京 YMCA の総主事・山本邦之助の尽力に負うところが大きい³⁷⁾。

完成した東京 YMCA 体育館は、大体育室の規模が 23.8×17.2 m と YMCA 中では先にも後にも最大の広

図—6 東京 YMCA 体育館

図—7 神戸 YMCA 第 2 期会館・体育室

さを確保するとともに上部にランニングトラックを備え、このほかに室内プール、柔剣道場、ボーリング室などの付属体育施設を備えた完成度の極めて高い総合体育館であり、戦前においてはこれに勝る体育館はなく、画期的な存在であった。次稿であらためて詳述するように、これは当時最新の米国 YMCA の会館をモデルとして計画されている（図—6）。

この施設における体育事業の主眼が奈辺にあったのか、その完成記念のパンフレットに的確に示されているので、少々長いが以下に引用しておこう³⁸⁾。

「この種の運動場の特長の一は、その運動が総て命令的に行わるゝにあらずして社交的に行わるゝにあり、（中略）もし試みに新式の運動遊戯をなして、淋漓として温かくけぶる汗に濡るゝや直ちにシャワバスに入りて、全身を洗滌する時などの心持よさは、實際経験するものにあらずば、その快感を語るに足らず、一たびこの快感を味ふたるものは、先づ夜間夢円かなる安眠を貪るを得るを以てその効果を知るべく、（中略）常に気分爽快にして繁劇なる事務を執るにも敏活なる手腕を揮ふことを得るに至り」

ここには、「レクリエーションの館」としての性格と役割がじつに明瞭に示されている。

ところで、東京 YMCA の場合はもともと既存の本館を有する好条件に支えられて、これほど充実した専用の体育館ができあがったと考えられることから³⁹⁾、これを以て専用化が定着したとみなすのは少々無理がある。

専用化が確立するのは、むしろ次の大正 11 年に完成した神戸 YMCA の新会館においてとみることができる。大正 2 年に建設された旧会館が都市再開発にあつて移転建て替えられたものであるが、旧会館が講堂との兼用体育館であったのに対して、わずか 9 年後の新会館では、講堂とは別に専用のしかも有効スペースがより一層広い体育室が設置されている。東京 YMCA 体育館で先鞭がつけられた専用化が、この神戸 YMCA の新会館において動かし難いものとなったわけである⁴⁰⁾（図—7）。

この原動力になったのはバスケットボールの隆盛であり、体育館はもはや「体操場」の延長線上にとどまるものではなく、「屋内球技場」としての概念を確立することになった。これ以後の YMCA 体育室の吹抜有効スペースの形状は、大正 6 年に日本で最初に定められたルールによるコート最小値 (60 ft×35 ft : 18.3×10.7 m) におおむね相当しているが⁴¹⁾、これが何よりの証左である。これ以後現代まで、体育室の規模決定にはバスケットボールコートを基準にすることが一般的になっているが、その淵源をこの時期に求めることができる（表—2）。

ところで、屋内スポーツの進展は予想以上に早く、上記の神戸 YMCA の体育室は専用化の完成期にあたるも

のであるのに加えて、次に述べるように既に第Ⅳ期の性格をも備えるものであった。

3.5. 第Ⅳ期

東京 YMCA の体育館が完成したのと同じ大正 6 年に、体育家 W.S. ライアンが北米 YMCA から派遣され、先来のブラウンを助けて指導するようになって以後、日本の YMCA の体育事業は一段と発展し、その活動内容も球技はもとより器械体操、体育ダンス、柔剣道と多様な展開をみせるようになり、体育事業抜きに YMCA を語ることができないほどの重要な位置を占めるようになった。例えば、東京 YMCA では、大正 11 年の体育部の年間使用人員は 57,080 名の多きにのぼり、前年度に比べて 8,341 名の増加、水泳部は 38,697 名で、12,502 名の増加がそれぞれ報告されている⁴²⁾。

前述の神戸 YMCA の新会館はこのような時期に建設された。この新会館の体育室は、ステージがなくなり吹き抜け部分が広がったのを除けば、一見、旧会館のそれとさほど変わらず、従前の形態を基に単に屋内球技への対応と専用化を計ったに過ぎないものと解釈できそうである。ところが、残されている設計図によると、完成した形態には必ずしも現れていない別の解釈ができるのである（図—8）。

その平面図には、実際に建設された体育室の形状がその通り描かれているのであるが、と同時に、コの字型の 2 階ギャラリーの部分に重なるように、消えかけた線で長円形のランニングトラック、および運動者が体育室フロアとランニングトラックを行き来するためのらせん階段が描かれている。しかも、断面図によるとその部分には「ランニングトラック」と名称が明示されており、その上、トラックのカーブ部分には走りやすいように床にバンク（傾斜）が施されてさえいる。つまり、当初の計画が明らかに東京 YMCA と同様の形式を意図していたことを物語っているのである。

では、一体どのような事情で計画変更が成されたのであろうか。使い慣れた従前の形式を踏襲したとみるのが最も考えやすい理由であるが、あえて講堂とは別に分離され専用化を果たしたものに対する解釈としてはあまりにも消極的であろう。むしろ、この間のバスケットボールの急速な普及とその競技試合の頻繁な実施に理由を求めると極めて無理なく説明がつかうのである。

講堂との兼用から脱し専用化を計ろうとする上で、直前に完成した東京 YMCA の専用体育館は良い手本であり、当初の計画が東京 YMCA と同じくランニングトラックを持つものであったのは自然の成り行きであろう。ところが、このランニングトラック形式は体育室の全周に施さなければならない、カーブ部分もあり、面積効率の点で極めて不利である。限られた面積の中では球技用のスペースの確保を困難にする。そこで、体育室を総

合的なレクリエーションスポーツの場とするか、あるいは主として球技の場として位置付けるかの選択に迫られ、結果として後者が選択された。それは、球技の普及を物語ると同時に、面積上の制約が強かったことを示している。しかし、そうであるならば、いっそのこと観覧席すらも取り止め、少しでも吹抜け部の広い体育室にするのが得策であつたろう。しかも、集会用途は考慮する必要がないのではなおさらである。ところが、結果は、バスケットボールが可能な最低限のスペースを確保するにとどまり、残りの面積をあえて観覧席に振り充てているわけであるから、観覧席設置については積極的な理由を求めなければならない。集会用途ではなく体育用途の面にそれを求めるならば、球技の競技・試合の観戦を除いてほかには考えにくい。事実、東京YMCAができ、また良き指導者が輩出する中で、球技(主にバスケットボール)の試合がこのころより一段と活発になってきた状況からもこの推察は可能である。

このことは、大正14年に完成した大阪YMCAの新会館内の専用体育室の形状をみるとより明確になる。この体育室は東京YMCAのそれに次ぐ21.8×13.3mの規模を有し、2階には1階のフロアを取り巻くように口の字型の観覧席が施されている。これは疑うべくもなく、競技の観戦を四周のどこからも可能にする形態であり、一方向に視線を集中させる講堂式のギャラリーとは決定的に異なっている。このようなギャラリーを持つ体育室は、小規模ながらもスタジアム形式に近く、競技試合の開催に都合が良い形態となっている⁴³⁾。ただし、真上に近い角度からの観戦はかならずしも理想的とはいえない。にもかかわら

図—9 大阪YMCA第2期会館・体育室

1 階平面図

注：この図面では体育室フロアとギャラリーを結ぶらせん階段が明瞭ではないが、ギャラリーの左側に位置している。体育室がある地階平面図には明瞭に記されているが、紙面の都合から割愛した。

断面図

図—8 神戸YMCA第2期会館設計図

ず、戦後の体育館ではいまだにこのデッキ形式の観覧席が踏襲されている。(図—9)

さてこのように、前期までの施設が、スポーツを「する」ことに重点がおかれていたとするならば、この期の施設は、「する」はもとより、むしろそれ以上に「みる」あるいは「みせる」機能に比重がかけられたという対比が可能であり、ここに、体育館の概念にまた一つ「屋内競技施設」という新しい要素が加わったといえることができる。たとえそれがいい過ぎであっても、少なくともその萌芽が生じたとはいえるであろう。事実、球技に限らないが、学校体育と社会体育を問わず熱狂的な競技ブームが起こり、早くも大正15年文部省は、「体育運動の振興に関する件」の中で、「世上動もすれば体育運動を一部愛好者の専有に任せ、あるいは運動競技において徒に勝敗に捉われ」と警告を発するほどであった^{44)*45)}。

ところで、大正13年に完成した名古屋YMCA会館の体育室は講堂との兼用ではあったが、床にはバスケットコートラインが引かれるなど体育用途を優先してい

図—10 名古屋 YMCA 会館・講堂兼体育室

図—11 名古屋 YMCA 会館
(舞台前のバスケット)

た。設計図にも「GYMNASIUM」と記されていた。また、2階ギャラリーはステージに相対する方向ではなく、長辺の一边に沿って長く伸びる一文字型をなしており、曲がりなりにも球技の観戦に適した形をとっている。この点、同じ兼用型でも第Ⅱ期のそれとは決定的に異なっている。しかし、写真に示すように、バスケットボールの使用時に、ステージ前に仮設のバスケットを置かざるを得ないという不便を強いる点もあり、集会用途との兼用からくるこのような苦慮のあとをみると、体育館の形式の発展は必ずしも一様でないことがわかる。ただし、名古屋 YMCA の場合、事情により米国からの資金援助がまったく得られなかったため、ほかに比較して水準の低いものしか建てることができず、このような結果をもたらしたことも否定できない⁴⁶⁾ (図—10, 11)。

3.6. 大阪 YMCA 以後

大阪 YMCA 以後新しい会館の建設はなく、ただ関東大震災によって損壊した東京 YMCA と横浜 YMCA の修増築をみるにとどまった。

ところで、昭和期に入って球技熱はますます高まり、「……近時籠球界の進展は驚異的にして最早一時も大競技場（体育館のこと：筆者注）なしに過ごされぬ状態」となったが、なかなか実現せず、「一方には大体育館建設の計画を進めると同時に、他面急造の競技場を計画」し、応急策として、大日本バスケットボール協会により、昭和8年、明治神宮外苑に組立式のコートが建設された。必要に応じて床板を組上げるだけで、覆いもなにもない屋外コートであったが、その規模は30.3×18.2mと、当時の国際競技資格の26×14mを十分上回るものであり、観覧席もかなり大きなものが設けられた⁴⁷⁾。

その後、大体育館の計画は頓挫していたが、昭和12年文部省により、東京神田一ツ橋に国民体育館が建設された⁴⁸⁾。これは、国民体力の増強を主眼として、「人口10万人以上の都市に1館ずつ建設される予定」であったが、戦局が厳しくなり始めたこともあって、結局この東京の1館だけに終わった。この体育館は33.2×25.4mと競技に十分な広さを持ち、2階には、一边に主観覧席を、残りの3辺に狭いながらも観客デッキを配し、主観覧席の中央には貴賓席さえ設けるなど、競技観戦の便に重きを置いて計画されている。これが戦前における唯一の公共体育館であるが、すでにこの時点において、戦

1階平面図

2階平面図

図—12 国民体育館平面図

後ほうはいとして建設されるようになった競技利用中心型の公共体育館の原形が形作られているといえよう⁴⁹⁾。(図—12) 見方を変えれば、それは、前述の大阪 YMCA において先鞭がつけられた口の字型観覧デッキを持つ体育室の形式の定着とみることができよう。

4. まとめ

① 以上のように、各期の YMCA 屋内体育施設は、比較的短期間のことでありながら、じつに明瞭に屋内スポーツ特に球技の進展にしたがってその性格と形態を変化させている。これには、明治期のものを除くすべての会館の設計が W. M. ヴォーリズという一人の建築家によって設計されたことが大きくあずかっていることは否定できない。しかし、上述の概念的および形態的発展は設計者個人の主観的な発展ではなく、明らかに時代の要請にしたがった客観的な発展であることも詳述してきた通りである。幸いにも、単一の設計者であるがゆえに、その発展の経路を明瞭に追うことができたわけである。

② その発展の過程を要約すると、計画概念的には、まず、「体操場」的施設からはじまり、「レクリエーション場」、「屋内球技場」、「屋内競技場」という発展を遂げた。

また、体育室の設置形式は、「講堂転用型」、「講堂兼

用型」,「体育室専用型」という発展を遂げた。

この両者があいまって各期のそれぞれの具体的な形態を形作っていったが、最終的には、上部に口の字型観覧デッキを持つ形式に到達した。この形式が戦後における競技利用中心型の公共体育館に継承されることになる。

謝 辞

末尾ながら、論文の作成に当たってご指導いただいた九州大学・青木正夫教授、ならびに九州産業大学・坂本磐雄助教授に深甚の謝意を申し上げます。また、資料収集に際しては多数の方々のご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表します。木下秀明日本大学教授、水谷豊上越教育大学助教授、山形政昭大阪芸術大学講師、菅野誠教育施設研究所社長、永井三郎氏、星野達雄氏、落合則男氏、牧田 稔氏、井田昭子氏、野村武夫氏、滝口敏行氏、渡辺芙美江氏、その他日本 YMCA 同盟、各都市 YMCA 関係者の方々

注

- 1) ただし、社会用屋内体育施設としての武道場・武道館は数多く存在し、むしろ主流をなしていた。しかし、ここでは、体操、球技を主とする近代的な体育施設に限定して考察する主旨から、これら武道施設は対象外とした。
- 2) 事実、「厚生省体力局、体力向上施設参考資料第2輯、体力向上施設調、1939」の中の「武道場及体育館一覧表」には、東京 YMCA 体育室、名古屋キリスト教青年会体育館の名が記されており、準公共施設としての取り扱いを受けている。また、このことは、東京 YMCA の大正11年度の事業報告において、体育部会員839名中、非キリスト教徒である一般会員が実に790名(約95%)の多きを占めていたことから明らかである。
- 3) 青木正夫：小学校のホール(講堂・雨天体操場)に関する計画史的考察、日本建築学会論文報告集、第69号、1961.10
同：小・中学校の建築計画的な研究、2部・小学校の建築計画に関する史的考察、学位論文、1962
- 4) 木下秀明：近代日本における体育館の歴史、日本大学人文科学研究所研究紀要第22号、1979.3
- 5) 木下秀明：前掲4)
- 6) 高木秀太郎：第5回内国勸業博覧会、1903、大阪府立図書館蔵
木下秀明：日本体育大学八十年史、学校法人日本体育会、1973、p.295~308
- *7) この直後に体育事情調査のため文部省より欧米に派遣され、後の「学校体操教授要目」の立案者となった永井道明は、その通信の中で欧米の自治体が設置する体操教室を“体育場”として紹介している。(「普通教育に於ける体操取調報告を読む」、日本体育会発行「体育」第155号、p.74、1906.10)
- 8) 木下秀明：日本体育大学八十年史、p.298~300
- 9) 吉田光邦編：万国博覧会の研究、思文閣出版、1986.2、p.288
東京市役所市史編さん係編：東京勸業博覧会案内、1907、大阪府立図書館蔵
- *10) 木下秀明氏は、別著：名称からみた屋内体育施設の系譜

(米国の大学の場合)、体育史研究第3号、1986.3、において、「運動内容が多様化したため、それらを含むする名称である体育を用いて体育館と呼ばれるように変化した」と同様の指摘をしておられる。

- *11) ここには、体育なる概念が、知育、徳育と並んでそもそも教育の目的的概念でありながら、やがてその外延が広がり、手段的あるいは現象的概念としての即物的な運動一般をも「体育」と呼称されるようになった明治後期の体育界の状況を率直に反映していることがうかがえて、極めて興味深い。
なお、体育概念の変遷については次の書に詳しい。木下秀明：日本体育史研究序説、不昧堂出版、1971
- 12) 「基督教青年会一覧」、日本基督教青年会同盟、1911.9
- 13) 島田正士：大正時代の体育・スポーツ第一集、新聞による資料、さつき書房、1979
- *14) 昭和15年に開催予定の第12回オリンピック東京大会は戦局の広がりにより中止された。
- 15) 文部省：現代体育の施設と管理、日黒書房、1931
- 16) 安田引嗣：師範大学講座体育第11巻「体育館」、建文館、1936
- 17) 木下秀明：前掲10)
- 18) 木下秀明：スポーツの近代日本史、杏林書院、1970
- 19) 竹之下休蔵、岸野雄三：近代日本学校体育史、日本図書センター、1983
- 20) 「体育」第161号、日本体育会発行、1907.4
- 21) 「基督教新聞」、1886.9.29号(奈良常五郎「日本YMCA史」1959所収)
- *22) 「基督教青年」、第52号(1903.12.15)、第56号(1904.5.31)、東京基督教青年会発行
なお、河東義之編「ジョサイア・コンドル建築図面集Ⅰ」(中央公論美術出版、1980)によると、明治27年に完成した東京YMCA会館(本館)の設計図面には、地階に「体操教場」なる室が記されているが、規模が狭く、その室で本文中に記したスポーツが実施されたか否か定かではない。
- *23) 遊戯としてのバスケットボールは、米国留学経験者である成瀬仁蔵(日本大学設立者)によって明治20年代末にわが国に紹介され、それを改変したものが女学校を中心に普及していた。これが日本式と呼ばれるものであるが、YMCAのものもおそらくこれであろう。
(兵庫県バスケットボール協会編：「兵庫県バスケットボール協会60年史」)の中の、野村治夫著「明治期バスケットボール」参照)
- 24) 「ANNUAL REPORT 1914」、東京基督教青年会発行
- 25) 「長崎YMCA 80年のあゆみ(創立80周年記念)」、長崎キリスト教青年会、1985
- 26) 野村武夫：京都YMCA 70年史、京都キリスト教青年会、1975
- *27) 木下秀明：前掲18)ただし、ピンポンはテニスの室内版として評価は高かったようである。
- *28) 今村嘉雄：日本体育史、不昧堂出版、1970
なお、明治44年の中学校令一部改正により、撃剣、柔道が正課として体操科に加えられ翌45年から実施された。
- 29) 滝口敏行ほか：大阪YMCA 100年史、大阪キリスト教青年会、1982

- 30) 奈良常五郎：日本 YMCA 史，日本 YMCA 同盟出版部，1959
- 31) 木本茂三郎：YMCA 史ノート，日本 YMCA 同盟出版部，1983
- ※32) MAY, 1911 という年月が記された設計図の設計者の欄に，「SHATTUCK & HUSSEY-CHICAGO, ILL-USA. W.M. VORIES & CO-HACHIMAN, OMI, JAPAN-ASSOCIATED ARCHITECTS.」の記載がある。
- 33) 日本建築学会編：建築資料集成 4，学校，1965
- 34) 大和久泰太郎：横浜 YMCA 百年史，横浜キリスト教育年会，1984
- 35) 日本 YMCA 同盟発行の「開拓者」，1908，5 月号の中に，「渡米実話（1），青年会概観，文学士小松武治」が掲載されている。
- 36) 基督教青年会一覧，前掲 12)
- 37) 山本邦之助：南十字を望みて（八十翁回顧録），新教材社，1949。ならびに山本邦之助：「禿翁百話」，新々堂，1951
- 38) TOKYO Y.M.C.A.，体育館並増築講堂献堂式記念，東京基督教青年会，1917.10.26
- ※39) 建築家コンドルの設計になる本館が明治 27 年に完成している。神田の青年会館という通称で講堂は多方面の集會に利用されていた。
- 40) 「70年の歩み」，神戸市基督教青年会，1969。
- ※41) 大正 4～5 年の米国の公式規則が，大正 6 年に翻訳され適用されたものであるが，本格的なルールとしてはわが国最初のものである。（前掲 23）参照）
- 42) 齊藤 実：東京キリスト教育年会百年史，東京キリスト教育年会，1980
- 43) 滝口敏行ほか：前掲 29)
- 44) 今村嘉雄：前掲 28)
- ※45) 事実，この頃よりバスケットボールの大規模な大会が開催されるようになった。例えば「第 1 回全日本選手権大会，大正 10 年」，「第 1 回関西選手権大会，大正 12 年」，「第 1 回全関西選手権大会，大正 13 年」，「第 1 回明治神宮競技大会，大正 13 年」である。（前掲 23）参照）
- 46) 「名古屋基督教青年会新築落成記念」，名古屋キリスト教育年会，1925.2，および吉村欣治：「名古屋 YMCA 六十年史」，名古屋キリスト教育年会，1964
- 47) 「大日本体育協会史，下巻」，大日本体育協会，1937
- ※48) 「文部時報」，第 583 号，1937.5.1 号，文部省
なお，「大日本体育協会史補遺」によると，昭和 14 年，大日本体育協会は東京市に対し，「中央体育館を（市内）聖橋畔敷地に建設されたい」との陳情を行っているが，実現されていない。
- 49) 厚生省体力局：体力向上施設参考資料第 5 輯「武道場及体育館」，1939.7
- 50) 「W.M. VORIES & COMPANY ARCHITECTS, Their work in Japan 1908～1936」(ヴォーリス作品集)，城南書院，1937
- 51) J. ネイスミス著，水谷 豊訳：バスケットボール その起源と発展，城南書院，1980
- 52) 菅野 誠，佐藤 譲：日本の学校建築，資料編，文教ニュース社，1983
- 53) 井上一男：学校体育制度史，増補版，大修館，1970
- 54) 栗山幸三編：体育施設全書 2「学校体育施設」，第一法規，1970
- 55) 日本体育学会体育史専門分科会編：「日本スポーツ百年の歩み」，ベースボール・マガジン社，1967
- 56) 岸野雄三：「近代体育スポーツ年表」大修館，1973
- ＜写真等の出典出所＞
- 図-2 J. ネイスミス著，水谷 豊訳「バスケットボールの起源と発展」より転載。なお，この写真の講堂はどの YMCA のものか定説がないが，筆者は，ステージおよびギャラリーなどの内部形状から，大阪 YMCA のものと推定した。
- 図-3 野村武夫「京都 YMCA 70 年史」より転載
- 図-4 「“Snaps” and “Flashes” From Kobe Japan」より転載
- 図-5 日本体育学会体育史専門分科会編「日本スポーツ百年の歩み」（ベースボール・マガジン社提供）
- 図-6 東京英語学校所蔵（1917 撮影）
- 図-7 「神戸青年会商業学校大正 14 年度卒業記念写真帖」より転載
- 図-8 神戸 YMCA 所蔵
- 図-9 滝口敏行ほか「大阪 YMCA 100 年史」より転載
- 図-10 「名古屋基督教青年会・新築落成記念」より転載
- 図-11 吉村欣治「名古屋 YMCA 60 年史」より転載
- 図-12 厚生省「武道場及体育館」より転載

SYNOPSIS

UDC : 725.85

CHANGE PROCESS OF PLANNING CONCEPT AND FORM ON Y.M.C.A. GYMNASIUM BEFORE WORLD WAR II

—Historical consideration on planning of social gymnasium, Part 1—

by **SHIGERU KAMIWADA**, Assistant Professor of Kyushu
Sangyo Univ., Member of A. I. J.

In this paper, author analyzed change process of planning concept and form on Y. M. C. A. Gymnasium before World War II. By results of analysis, author made clear which those change follow growth of indoor sports.

It's change process is as follows ;

1. on planning concept, "gymnastic room" "recreation house" "place for indoor ball game" "indoor stadium"
2. on type of institution, "diversion use type of auditorium" "complex use type of auditorium & gymnasium" "exclusive use type of gymnasium"